

# (公財) 三康文化研究所附属三康図書館

---

- ▶ 旧大橋図書館120周年記念事業
- ▶ 第1回講演会 2020.06.25

- ▶ **公共図書館の源流 大橋図書館**  
**-- 出版社のつくれた図書館 --**

▶ 奥泉 和久

# 目次

---

- ▶ 1 はじめに
- ▶ 2 大橋図書館の源流：1901年まで
- ▶ 3 開館から関東大震災まで：1902～23年
- ▶ 4 震災復興から戦前期まで：1924～45年
- ▶ 5 おわりに

# 1 はじめに

---

- ▶ 1902(明治35)年6月15日、大橋図書館開館式、6月20日閲覧開始
- ▶ タイトルの「公共図書館の源流」という意味について

(第1の理由)

- ▶ 東京(当時、東京府東京市)で初めて本格的なサービスをする公共図書館が出現

(第2の理由)

- ▶ 東京市に公共図書館が認知
- ▶ 大橋図書館理事・市会議員の坪谷善四郎、市会で市立図書館設立建議 → 東京市立日比谷図書館(現都立中央図書館)設立
- ▶ → 市内の各区に図書館

# 時期区分について

---

- ▶ 大橋図書館は、関東大震災で壊滅的な被害を受けた。震災が分岐点（三康図書館のHPも同様）
- ▶ 前史：1901年まで 博文館創業から設立に至るまで  
一出版事業者が図書館を設立する過程
- ▶ 1902～23年 震災前の約22年
- ▶ 1924～45年 震災復興以降、戦前期まで

# 公共図書館の源流 分析する視点について

---

- ▶ 大橋図書館＝「公共図書館の源流」！
- ▶ 大橋図書館の歴史的な意義を明らかにすることにも
- ▶ 前史について やや図書館の歩みから離れるが、出版社が図書館をつくったのは なぜか？
- ▶ 東京で初めて本格的なサービス なぜ実施できたのか？
- ▶ 東京市立日比谷図書館設立へ なぜ影響したのか？
- ▶ 第2期の震災復興図書館 時期的に源流と言えるのか？
- ▶ 大災害に遭遇した図書館がどのようにして復興を遂げたのか、との現代的な視点も設定できるか。

## 2 大橋図書館の源流：1901年まで

---

- ▶ 大橋佐平のプロフィール
- ▶ ■ 大橋佐平（おおはし さへい、1835－1901）
- ▶ 明治時代の実業家。越後生まれ。1886年上京し、1887年博文館を創立。……1901年大橋図書館を創設。同年11月3日死去。



## 2 大橋図書館の源流：1901年まで

### 2.1 大橋佐平の「初志」の所在

---

#### ▶ 図書館設立の趣旨

▶ ……当時潜に以為(おもえ)らく、斯業若し聖世の余沢に潤ひて、幸いに成功するを得ば、希くは図書館を設立して謝悃(しゃこん)の微意(びい)を表せんと。其後明治二十六年出版事業取調べのため、欧米を巡察するに方(あた)り、各国の都市に図書館の設備完(まった)きを視て、初志益々切なりき。今や是の素志を貫徹するの時機漸く近づきたるを覚ゆ。……(以下略)

▶ 下線部(初志のこと) → 欧米視察 → 下線部(初志……)

# 新太郎の証言

---

▶ 新太郎は、佐平から図書館設立についての相談を受けたとき（佐平の欧米視察以前）、「直ちに同意」をしたという。



▶ 国家教育の発達が、博文館の事業の成功した原因であります。して見れば博文館の事業は、国家教育の発達の結果により利益を収めておるのであって、決して自身並びに社員のみのもので成功したわけではありませぬ。

▶ 公共事業について、佐平と価値観を共有

▶ 博文館の事業 = 5年 → その源流を辿ってみる

▶ ■ 大橋新太郎（おおはし しんたろう、1863-1944） 明治期の実業家。父とともに博文館を設立し、日本有数の出版社とする。大日本麦酒、日本硝子など多くの役員をつとめた。大橋図書館を設立。震災復興時には私財を投じて経営を支えた。



## 2.2 佐平の長岡時代 (1) 青年期まで

---

- ▶ 1835(天保6)[1]越後長岡に生まれる 父は材木商
- ▶ 1838(天保9)[4]母から実語教(当時の教科書)および百人一首を習う
- ▶ 1841(天保12)[7]長岡の林忠左衛門に就いて読書と習字を習う
- ▶ 1844(弘化1)[10]長岡の大火、翌年父死去
- ▶ 1849(嘉永2)[15]京都智積院(ちしゃくいん)に叔父法如師を訪ね、四国・九州などを歴訪(~1850.2)
- ▶ 1853(嘉永6)[19]6.3 ペリー来航、藩医川上寿碩から海外事情を聞き、「地球図」を見る
- ▶ 1856(安政3)[22]酒造業を始める
- ▶ 1864(元治1)[30]母死去

# 母の遺言尚耳にあり

---

▶ ……かつて我を警めて曰く、家業素より欲する所あるべし。然れどもその業に正邪あり利害あり、他日汝実業家とならば、宜しくその業の性質を鑑み謹んで我が訓（おしえ）を忘るることなかれ、書籍業の如きは最も母の希望する所、また社会に益する所大なるべし、故に他を撰ばずして書肆を営むべしと諄々（じゅんじゅん）の言今なお耳底に存す。我ここをもって母訓を守り書肆を営みまた公共の事業に傾意せり。

▶ 「知自心百話」『佐平伝』

▶ 書肆は、本を売ることを本業とするが、それによって社会に知識・情報を広めることになり、それは社会へ貢献することを意味する、との趣旨であろう。

## (2) 幕末から維新後

---

- ▶ 1868(明治1)[34] 1.3 鳥羽、伏見の戦い(戊辰戦争起こる)、5~7月官軍と長岡藩の戦い、佐平は恭順派有志と会合して官軍に和平を斡旋
- ▶ 1869(明治2)[35] 2 新潟県に奉職(~12月)
- ▶ 1871(明治4)[37]10 有志と長岡小学校を開く(町人の子弟を集め、~1873)
- ▶ 1872(明治5)[38] 長岡洋学校開校に世話掛として尽力(~1878)
- ▶ 7 郵便取扱人となり自宅で郵便業務(~1877.12)、翌年長岡郵便局長
- ▶ 1874(明治7)[40] 信濃川の渡し船を運営(郵便取扱のため)

### (3) 母の遺言に導かれ

---

- ▶ この時期、出版業と雑誌を開始、のちに雑誌・書籍の書店経営に主力を移す。母の遺言に導かれてのことか。
- ▶ 1875(明治8)[41] 佐平ら、この頃長岡出版会社設立、図書出版(1877年以降とも)
- ▶ 1877(明治10)[43] 『北越雑誌』(北越社)創刊(佐平関与?)  
この年 雑誌の売捌きを開始(大橋書房、1878年には書籍も)
- ▶ 1881(明治14)[47] 3 『北越新聞』(北越新聞社)創刊、佐平内紛で脱退  
6 『越佐毎日新聞』(越佐新聞社)創刊(~1890)、1888年譲渡
- ▶ 1886(明治19)[52] 11 上京
- ▶ **佐平** 書店経営は新太郎に任せて新聞発行……新聞も新太郎に任せて上京……**次から次へと新たな事業に着手しては……**

## 2.3 博文館の創設

---

- ▶ 社名の由来 河井継之助が造士寮を設け、寮則「博文約礼」による
- ▶ 1887(明治20)[53]6.15 博文館創業、『日本大家論集』刊
- ▶ 1893(明治26)[59]3.30 出版事業視察のため欧米視察(~11月)、  
図書館を見学



1892(明治25)年頃の  
博文館

# 博文館 15周年まで

- ▶ 1895(明治28)[61]従来の雑誌を『太陽』『少年世界』『文芸倶楽部』に集約して創刊  
この年 退隠し、博文館の事業を専ら新太郎らに任せる
- ▶ 1898(明治31)[64]5.24 同郷の大倉喜八郎還暦銀婚祝園遊会に出席、私立学校(大倉商業 学校、現東経大)創設を披露(石黒が尽力)
- ▶ 1900(明治33)[66]9 石黒を訪問、図書館のことを相談 図書3万冊をこの頃までに収集
- ▶ 1901(明治34)[67]1 石黒を訪問  
11.3 佐平没



博文館の出版物

## 図書館のことを石黒に相談

---

- ▶ ■ 大倉喜八郎(おおくら きはちろう、1837-1928) 大倉財閥の創設者。
- ▶ ■ 石黒忠憲(いしぐろ ただのり、1845-1941) 明治、大正時代の医師、軍人。1888(明治21)年軍医学校長、1890年陸軍軍医総監、陸軍省医務局長などを歴任。近代軍医制度の確立につとめた。陸奥伊達郡(福島県)出身だが、新潟に移る。
- ▶ 1900.9の訪問時…… そこで余[石黒]はこう考た。大都の書籍や、古昔珍奇の書籍を調べやうといふ人は、上野[帝国図書館]なりお茶の水[帝国教育会附属図書館]なりの図書館に行くべく、日用切実の本を調べ読まふといふ人は、此の大橋図書館に来(きた)るべく……又子僧とか車を曳く輩(はい)とかいふ人が、門前に荷物を卸して、泥足のまゝで一寸入て……其事を翁にいふたら、それは何より結構だから、いかにもそうしてもらいたいとて……
- ▶ 庶民が利用する図書館のこと → 当時、通俗図書館と称した

## 3 開館から関東大震災まで：1902～23年

### 3.1 開館時の状況

---

- ▶ 1902(明治35) 5.25 協議員15名を委嘱  
6.15 大橋図書館開館式 6.20 閲覧開始
- ▶ 1903(明治36) 3.- 奨学閲覧券を発行(児童は無料で閲覧)  
8.1 夜間開館実施(一部)  
8.1 日本文庫協会、第1回図書館事項講習会開催  
(～8.14・大橋図書館)
- ▶ 1911(明治44) 1.6 館外帯出実施
- ▶ 1912(明治45) 4.1 夜間開館、各閲覧室でも実施
- ▶ 1915(大正4) 年度末の蔵書約7万冊



# 大橋図書館

---



大橋新太郎



- ▶ 本館 木造2階建て 書庫 煉瓦造3階建て 建坪112坪 延べ267坪(約883m<sup>2</sup>) 右が私邸

# (1) 組織・経営

---

- ▶ 財団法人として認可。
- ▶ 寄附行為証書によって運用、協議員15名を嘱託、
- ▶ 協議員 石黒忠憲、高田早苗、田中稲城、上田万年、手島精一、寺田勇吉、安田善次郎、大橋新太郎、大橋省吾、坪谷善四郎ほか5名。
- ▶ このなかから理事5名などを選出、石黒、上田、坪谷が理事を兼任
- ▶ 館長(名誉職) 石黒忠憲
- ▶ 主事(実質的な館長) 伊東平蔵(田中稲城の推薦) 諸規程の整備など図書館実務を整備
  
- ▶ ■ 田中稲城(たなか いなぎ、1856-1925) 当時、帝国図書館長。
- ▶ ■ 伊東平蔵(いとう へいぞう、1856~1929) 文部省勤務を経て、帝国教育会。1902(明治35)年大橋図書館主事。1906年9月東京市立日比谷図書館開設準備主事。数多くの図書館づくりに携わった。

# 表1 1907（明治40）年度の財政状況（部分）

歳入			
1	維持基本金収入	7,663	69.5
4	図書閲覧料収入	1,771	16.1
	合計	11,021	100

維持基本金収入：公債利子、会社利益配当金、銀行預金利子

歳出			
1	管理費	4,366	39.6
2	図書費	1,771	16.1
5	基本金繰込	3,483	31.6
	合計	11,021	100

管理費：報酬及び諸給与、保険料、修繕費など

# 1907（明治40）年度の財政状況

---

- ▶ 維持基本金の運用収入で管理費をまかない、閲覧料収入を図書費に充当。
- ▶ 支出全体の30%が基本金に繰り込まれ、これが年々増加、財政状況を安定させていた。
- ▶ 「監事大橋新太郎、安田善次郎の二氏に嘱し、基本財産の運用を一任し、両氏は最も有利なる債権に放資し、殊に有利にして安全なる株式を選んで買い入れたる為」と説明。
- ▶ ■ 安田善次郎（やすだ ぜんじろう、1838-1921）安田財閥の創設者。

## (2) 利用の条件      (3) 施設・設備など

---

### ▶ (2) 利用の条件

▶ 大橋図書館 1回3銭 雑誌 1銭5厘

▶ 帝国図書館 普通3銭 20歳以上

▶ 日比谷図書館 普通2銭 新聞雑誌1銭 日比谷、深川以外無料  
(のち深川も無料に)

▶ この頃 あんぱん1銭、コーヒー3銭、そば(もり・かけ)2銭

### ▶ (3) 施設・設備など

▶ 当初 和書3万冊 洋書2千冊 和雑誌3,300冊 外国雑誌500冊

### (3) 施設・設備



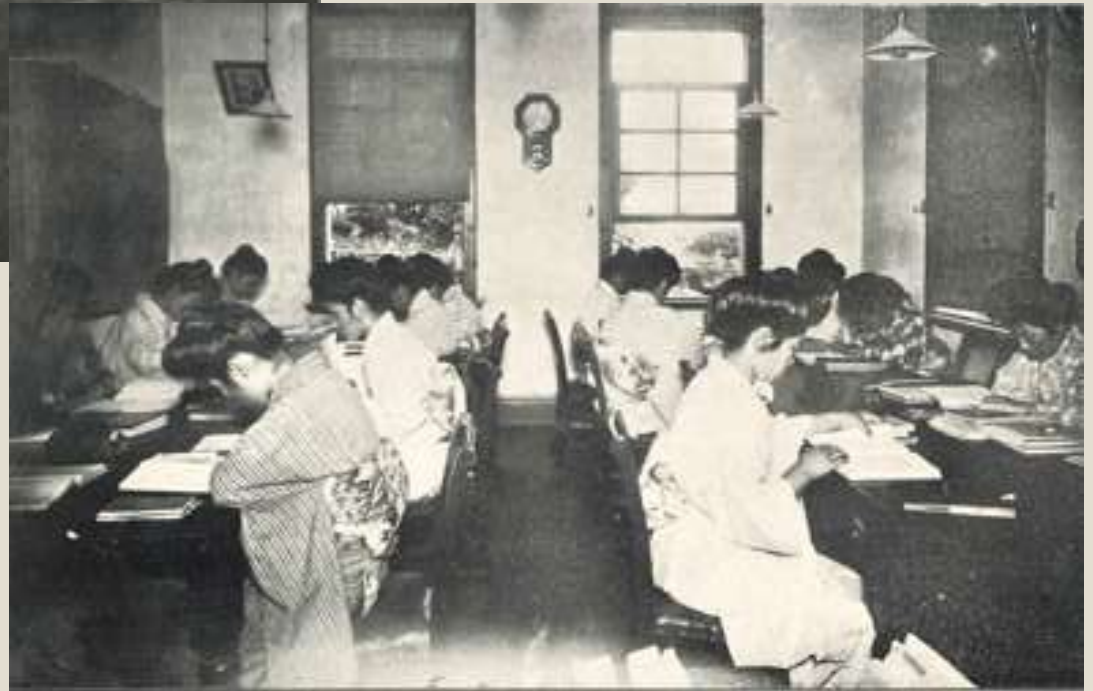
2F 閱覽室(168席) 婦人室  
1F 新聞雜誌閱覽室(100席)

# 婦人室



閲覧室の1/6くらい？

左 子どもらしき姿  
右  $168/6=28$ ？





# 1階新聞雑誌閲覧室

---



新聞雑誌閲覧室  
(100席)

手前に少年の姿

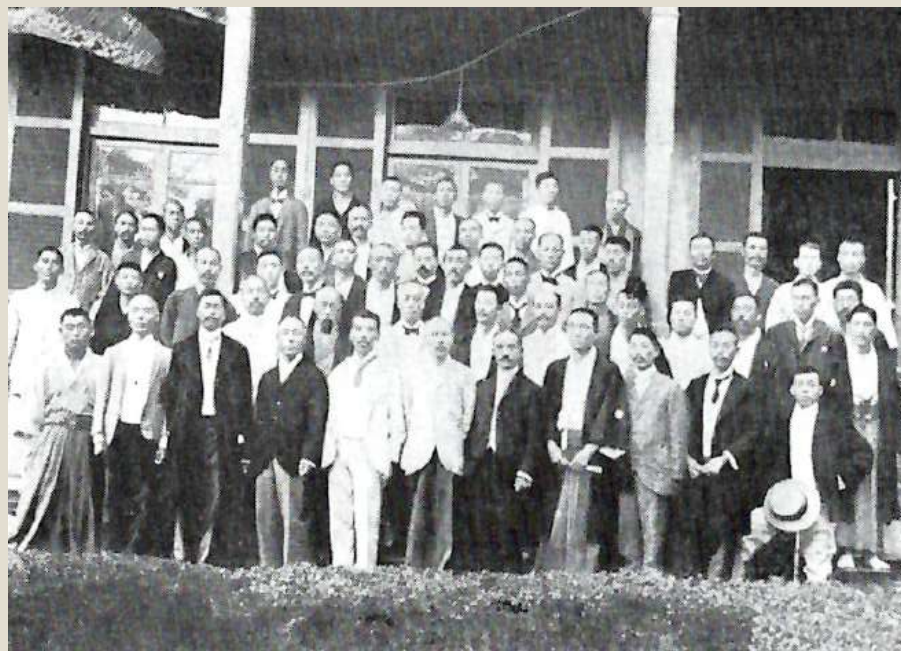
夜間開館 1903.(明治36).8- 新聞雑誌閲覧室と「同室備付ノ図書、雑誌、新聞ノ外数学、理学、医学、法学ニ関スル図書」に限り実施  
(午後6～9時) 1912(明治45).4- 全館実施



# 図書館事項講習会

- ▶ 1903(明治36)年8月1日から14日 日本文庫協会主催 第1回図書館事項講習会 会場 大橋図書館

同館主事伊東平蔵が講習会の開催を主唱、30名の募集に全国から54人が応募。1日平均3時間、講師には伊東平蔵、田中稻城、和田万吉など協会草創期の図書館員らが名を連ねた。



## 3.2 利用状況 当時の状況について

---

- ▶ 震災前、時期は不明だが……
- ▶ 「平日でも大抵は満員であつた。いわゆる弁護士や医師の卵がその半分を占めていたかもしれない」、また「当時の婦人室の利用はあまりにも少数だった……」
- ▶ 開館当初の見学記には……
- ▶ 「婦人室の外は図書閲覧室満室」との札がかかっていた……など

## 表2 大橋図書館1日当たりの閲覧者数の推移

---

- ▶ 1903～11年 明治36～44 209～287人 1908日比谷開館
- ▶ 1913～20 大正2～9 300～400 震災前のピーク
- ▶ 1925～26 大正14～15 11～15 関東大震災
- ▶ 1927～30 昭和2～5 750～800 市立3館より早く復旧、急増
- ▶ 1931～38 昭和6～13 600人台 軍人会館建設のため
- ▶ 1939～43 昭和14～18 700～900 連日満員かそれに近い状況

### 表3 閲覧者数の変遷 大橋、市立全館

- ▶ 1902年(明治35) 64,350
- ▶ 1903年(明治36) 71,435
- ▶ 1904年(明治37) 70,951
- ▶ 1905年(明治38) 79,828
- ▶ 1906年(明治39) 81,084
- ▶ 1907年(明治40) 94,193
- ▶ 1908年(明治41) 91,590 21,045 11.26日比谷開館
- ▶ 1909年(明治42) 91,127 234,608 深川、牛込、日本橋
- ▶ 1910年(明治43) 96,578 357,588 京橋、本郷など
  
- ▶ 1912(明治45)年度閲覧者数 10万 職業別内訳 学生:64,014人、官吏:3,359人、軍人:1,820人、実業家:5,554人、女子:4,984人、其他:22,381人、合計:102,112人

## 表4 1921年の利用状況

館内		館外		合計	
男	女	男	女	男	女
102,740	8,633	21,878	3,465	124,618	12,098
(92.2)	(7.8)	(86.3)	(13.7)	(91.2)	(8.8)
111,373(81.5)		25,343(18.5)		138,716(100)	

表4 震災前の利用のピーク時(1921年度)における閲覧者数  
 閲覧者数は、開館時のほぼ倍、女性の利用も増加。

**館外貸出**は、日比谷が貸出期間・図書の数に応じて、料金・冊数が設定されていたのに対し、大橋図書館は**保証金を5円を預ける**必要があったが(帝劇特等席の料金)、館外貸出18.5%は日比谷の5.6%に比べ利用率は高かった。

# 児童サービスに着手

- ▶ 1897(明治20)年 大日本教育会附属書籍館、「小学生生徒図書閲覧規則」を定め「諸学校長ノ認可証ヲ携帯シテ来館スヘシ」(第1条)
- ▶ 伊東が同館に在籍 これを踏襲？
- ▶ 大橋図書館「奨学閲覧券」を発行 小学校児童尋常5年以上で成績優秀者の推薦を校長に依頼して贈呈、震災まで実施。
- ▶ 『大橋図書館少年用図書目録』(1910) 約1,150冊を収録



## 児童サービスを実施していたが……

---

- ▶ 奨学閲覧券の発行枚数 500～1000程度
- ▶ 「壹年間ノ期限」(『第10回年報』)……何回も閲覧できた
- ▶ 1921(大正10)年 計2,743人
- ▶ 奨学閲覧券発行数の約2.5～3倍に相当
- ▶ 市内児童の平均利用数が14,000人で、震災前の利用はあまり活発ではなかったようだ。

## 3.3 東京市立図書館設立の経緯

---

- ▶ 1900(明治33) 11 日本文庫協会、市立図書館設立意見を提出
- ▶ 1901(明治34) 5 坪谷、東京市会議員に当選(～1922.6)
- ▶ 1902(明治35) 10 東京市教育会、「通俗図書館設立建議」書提出
- ▶ 1904(明治37) 3 坪谷、東京市で通俗図書館の設置を建議、議決
- ▶ 1906(明治39) 9 伊東、東京市立図書館事務嘱託
- ▶ 1908(明治41) 11 東京市立日比谷図書館開館式  
11 閲覧開始



伊東平蔵



# 坪谷による建議

---

- ▶ 坪谷「市の役人が図書館の事を顧みぬも無理はない。当時の市会議員の多数が図書館とは如何なるものかさへ知らぬ位……私は東京市会議員在中此時ほど多くの同僚に頭を下げて賛成を求めて頼みまわった事は全くない」
- ▶ 坪谷 大橋図書館の利用について
- ▶ 麴町、牛込、神田の3区で利用者全体の7、8割を占める
- ▶ 「図書館の利益を全市民に被らしむるには是非とも市立図書館が必要だと考えた。」
- ▶ 『四十年史』は1904(明治37)年度の数值。それ以前から分析？
- ▶ ■ 坪谷善四郎(つぼや、ぜんしろう、1862—1949) 明治-昭和時代の出版人、政治家。越後国加茂の生まれ、……

- 
- ▶ 1906(明治39)年11月 東京市立図書館、田中稻城、市島謙吉、坪谷といった図書館経営に関わりをもつ人びとを図書館評議委員に任命。
  - ▶ 「これはわが国の公立図書館ではみられなかったことであった。……大橋図書館ではすでに実施されていた。」(『東京都教育史通史編2』東京都立教育研究所, 1995.)
  - ▶ 市島謙吉(1860-1944)は越後出身、  
初代早大図書館長



田中稻城

## 4 震災復興から戦前期まで：1924～45年

### 4.1 復興図書館開館

---

- ▶ 1922(大正11) 大橋図書館新館計画 震災前の蔵書 8万7千冊
- ▶ 1923(大正12) 5 今沢慈海に顧問を嘱託、新館設計を決定

9.1 関東大震災、全館、全蔵書、同日仮事務所を坪谷方に置く

- ▶ 1924(大正13) 10 館外図書貸出事務を開始 蔵書約1万冊
- ▶ 1925(大正14) 1 大橋会、第1回会合
- ▶ 1926(大正15) 5 蔵書約4万冊

6.15 大橋図書館新築復興開館式 7.1 一般閲覧開始

- ▶ 1928(昭和3) 1 東京市立図書館から竹内善作が転入、主事
- ▶ ■ 今沢慈海(いまざわ じかい、1882-1968) 当時東京市立日比谷図書館館頭

# (1) 新太郎の決意

---

## ▶ 復興開館式の石黒挨拶

- ▶ 「……大橋新太郎君は其本邸を焼きました上に、関係の建物が二十箇所も焼失したといふ中でありますから、此大橋君にむかつて、尊父の遺志を継がれてもう一度図書館を立ててくださいといふことは私としては申出難い為に、只々嘆息して居つたのである。然るに震災後四十幾日かでありました。新太郎君が拙宅へ来て申さるゝには、従来の図書館は烏有に帰しましたが、是は亡父の遺志である故新たに図書館を建てゝ亡父の遺志を達せしめようと思ふから、相変らず御尽力を願いたいと申されましたので、私は殆ど落涙するやうな感じがしたのであります。」

- ▶ 『博文館五十年史』には、「館主の命に依りて、公益事業は一日も勿[忽]諸にしがたしとして……」と記し、図書館の復興を優先したとする。

# 裏方に徹した石黒と坪谷



# 新太郎の長岡時代 大橋図書館の源流 続

---

- ▶ 新太郎は、「父の遺志」……それだけであろうか。
- ▶ 1871(明治4)[9] 長岡小学校に入る
- ▶ 1872(明治5)[10] 長岡洋学校に入る
- ▶ 1876(明治9)[14] 上京、中村正直の同人社の少年寮に入る
- ▶ 1878(明治11)[16] 長岡に戻される
- ▶ 1879(明治12)[17] 書籍販売業に従事 この頃から越後・佐渡の有力者を歴訪(～1881)
- ▶ 1888(明治21)[26] 上京
  
- ▶ 1894(明治27)年、新太郎、スマイルズ(中村正直訳)『西国立志編』を博文館から出版(初版:1871刊)。
- ▶ 西洋思想を学び、自立した近代人を目指し、都市社会における図書館を社会の基盤ととらえていたのではないか。



## (2) 利用の条件      (3) 施設・設備など

---

### ▶ (2) 利用の条件

- ▶ 入場料 **児童室 2銭** 新聞雑誌室 3銭 普通室 5銭 特別室 10銭(『復興の大橋図書館』、ただし、震災後に発行された『第21、22回年報』には、児童室について有料の記載はない)。
- ▶ 日比谷図書館 館内閲覧 普通 1回券 3銭 特別 8銭

### ▶ (3) 施設・設備など

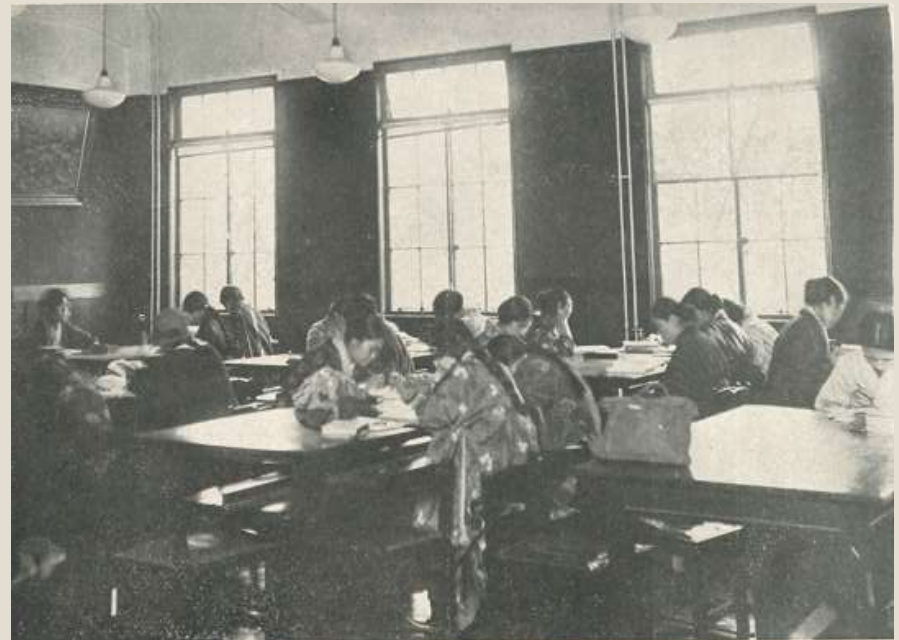
- ▶ 建築敷地 378坪(=1,250m<sup>2</sup>)
- ▶ 建築延坪数 886坪(本館:575.4坪、書庫:247.5坪、附属屋:63.2坪)(=2,930m<sup>2</sup>) **日比谷の1.38倍**
- ▶ 鉄筋コンクリート造(耐火建築) 鋼鉄製書架
- ▶ 参考:日比谷の建築延坪数 640坪(2116m<sup>2</sup>)

# 復興開館時の施設

- ▶ 定員 1928(昭和3)現在 合計440名
- ▶ 3F 書庫4 書庫5 特別閲覧室(144) 婦人室(40)
- ▶ 2F 書庫2 書庫3 普通閲覧室(216) 目録室 貸出室
- ▶ 1F 書庫1 児童新聞雑誌閲覧室(40) 館外貸出室 事務
- ▶ BF 下足室 予備



目録室



婦人室



# 閲覧室

特別閲覧室と普通閲覧室の  
違いは、スペース(4人  
掛け)の広さか調度品の違  
いか。



特別閲覧室



普通閲覧室

# 新刊書棚 金網に注意！

---



新刊書棚は、「我国に於る新しき試み」で「館外貸出書の陳列室を開放して」自由に選択できるようにした(半開架式)。「主として今沢日比谷図書館頭の指導」。1930、1931年に新調増加。

## 4.2 東京市のなかの大橋図書館

### (1) 竹内善作の転入と利用急増への対応

---

- ▶ 1927(昭和2)年、児童室を閉鎖
- ▶ 1928(昭和3)年1月 竹内善作、東京市立図書館から転入
- ▶ 翌年、図書分類変更に着手……利用急増への対応
- ▶ 1941(昭和16)年までの十数年の間に部屋・収容人員の変更を11回実施
  
- ▶ 1937年(昭和12)現在 合計544名 復興開館時よりも**104人増**
- ▶ 3F 書庫4 書庫5 特別閲覧室(184) **(新)研究室(3)**
- ▶ 2F 書庫2 書庫3 **(変)新聞室(32)** 普通閲覧室(234) 貸出室
- ▶ 1F 書庫1 目録室(+案内所) **(移)婦人室(39)** 館外貸出室
- ▶ B1 **+書庫** 下足室 **(新)学生自修室(24、のちに閉鎖)** **(復)児童室(60)**

## (2) 参考図書館としての整備

---

- ▶ 震災直前1923(大正12)年5月、日比谷図書館館頭今沢慈海に顧問を囑託して新館設計を決定。→ 震災で白紙？ 凶面焼失？
- ▶ 震災後の1925(大正14)年3月、竹内善作「大橋図書館の建築設計に関与」との記録(今沢の指示？)
- ▶ → 深川、京橋、駿河台が閲覧室と書庫を近接させ**安全開架式閲覧**を採用
- ▶ → 大橋図書館は**書庫出納を原則、一部半開架閲覧**とし、日比谷と同様に参考図書館とすることが検討されたのでは……と推察される。

- ▶ 1930年(昭和5)11月、研究室を新設
- ▶ 12月、目録室に電話機を置き(日比谷、1915年)、図書に関する質問を受ける(レファレンスサービスの開始)



- ▶ ■ 竹内善作(たけうち ぜんさく、1885~18950) 東京市立図書館では、『市立図書館と其事情』(1921年創刊)の編集を担当。1928年大橋図書館に移り、同館を有数の参考図書館として運営。

# 『トピック』の創刊

- ▶ 1937(昭和12)年9月、『トピック』創刊。創刊に際し、坪谷はレファレンスサービスのガイドのためと発行の趣旨を述べている。利用案内、図書に関する質問への対応、参考図書への掲載、閲覧者との応答(「エコー」欄)など。
- ▶ ■ 小谷誠一(おたに せいいち、1895-1979) 東京市立図書館ではレファレンスサービスの普及促進に尽力。1937年大橋図書館に移り、1945年主事、1948年館長。





- 
- ▶ 1937(昭和12)年12月、東京市立図書館からレファレンスサービスを専門とする小谷誠一が転入。
  - ▶ 翌年、館内研修のための中堅会を組織(40数人)。
  - ▶ 1938年(昭和13)年7月、書庫の増築工事開始、学生自修室を閉鎖。
  - ▶ 同年11月、図書予約閲覧の制度を設ける。
  - ▶ ① 図書指定閲覧 書誌事項がわかっている図書について閲覧の予約をする方法。
  - ▶ ② 用件指定図書閲覧 調査事項を記入して関係図書の選択を依頼する方法で、レファレンスサービスに相当する。
  
  - ▶ 竹内「私の在職中にこの規模が拡大出来、公共参考図書館として範を東亞に示すことが出来たとしたら無上の光栄である」

### (3) 児童サービスの位置づけなど

- ▶ 1929(昭和4)年 柴野民三が採用。児童室が閉鎖されていた……柴野は児童室担当、『まあるい・てえぶる』を作成。
- ▶ 利用の案内、児童の作品、自らの作品などが掲載されていて、子どもたちとのコミュニケーションツールというべきか。
- ▶ 1930年11月、児童室を復活、独立室に
- ▶ 1937年 柴野、童話作家となるため退職。
- ▶ ■ 柴野民三(しばの たみぞう、1909-1992) 昭和・平成期の児童文学作家、童謡詩人





- 
- ▶ この年の大橋図書館の児童の利用数男女合わせて11,416人
  - ▶ 日比谷の約35,000人 市立図書館の平均約1万数千人
  
  - ▶ この頃の活動を検証。
  - ▶ 高橋辰男「児童室の子供達」『努力』（第8号, 1939.12）同誌は、1938（昭和13）年に組織された大橋図書館中堅会の報告書。
  - ▶ 高橋は、東京市立図書館から転入したばかり。どの館にも常連はいるが他館では毎日、あるいは隔日に来館するが、大橋では5日か1週間に1回。その理由、周囲の2/3は住宅地域ではなく、半径1kmには住宅が少ないこと。本区、隣接区の利用が大半を占めるが、35区のうち20区くらいから集まってくる。これは他の児童室には見られない傾向、と分析。
  
  - ▶ 大橋図書館にそれだけの魅力を見出していた？

---

▶ 参考図書館に児童室 → 閉鎖 → 独立の閲覧室 なぜ？

▶ 宮沢泰輔 竹内について

▶ 「児童中心というか、児童を大事にして、児童の図書館がよくなければ大人の図書館もよくなならない、そういう考え方に信念をもっていましたね。だから児童室経営とか、設備とか、そういうことには全力をあげたんです。」

■ 宮沢泰輔（みやざわたいすけ、1904-1980）  
東京市立図書館。のちに都立日比谷図書館などに勤務。



## 戦争と図書館 三康図書館HPより

- ▶ この時期、もうひとつ加えておくべきこと。当時は、国家による検閲が行われていた。
- ▶ 憲秩紊本(けんちつびんぼん)は法律や秩序を乱す(紊乱)本という意味で、大橋図書館独自の名称であり、1940年5月に778冊、1943年9月に394冊の「閲覧禁止図書」に指定された図書を指します。
- ▶ 大橋図書館の主事であった竹内善作は、何かと理由を設けて憲兵や特高を書庫に入れず、基本(事務用)カードを別置保管して図書を守り抜きました。(三康図書館HP)。



# 金庫室？

---

- ▶ 戦時中、同館に憲兵が来館し発禁図書  
の提出を強要しても、竹内がなにか  
と理由を付けて、**金庫のような扉  
のある書庫**へは一步も入れなかった  
(清水正三『戦争と図書館』白石書店、  
1977)。
- ▶ 書庫を自由に探させたのではない  
か？
- ▶ 仮に金庫室を開けろと言われたら、  
書庫ではないので本はない、と主張  
できるのでは？



B1 金庫室

# 坪谷の主張

---

- ▶ この件について坪谷は次のように記している。
- ▶ 「官公立図書館は公衆に閲覧せしむることだけを禁じ、其の図書は其の館内に保存を許すも、私立図書館の分は一切自発的に警察署へ差出すべきことを命ぜられて居る相だ……差出した上は焼棄せらるゝであろうなどゝ聞くと、後世に残すべき文献が消滅し、取返しがつかぬことになる」
- ▶ (坪谷「搗粉木の重箱掃除」『図書館雑誌』37年7号, 1943.7)
- ▶ 竹内と同じ認識であろう。とすれば上の竹内の対応は、個人としてではなく、大橋図書館として対応したように思われる。
- ▶ この翌年に坪谷は退職。

## 5 おわりに

---

- ▶ 大橋図書館の「源流」について
- ▶ 佐平……青少年期には、町人としての教育を受け、世の中の動向に関心を示していた。
- ▶ 長岡の(長岡戦争の)戦後復興には、教育を最優先に考え、学校教育に従事。次いで郵便事業など。
- ▶ その後、新聞、雑誌、図書の出版・販売に携わる。
- ▶ 上京して博文館を創業。
- ▶ 仕事は異なるが、坪谷はこれらに共通しているのは、**人材養成**だという(『博文館五十年史』)。
- ▶ 時代の変革期における**教育、情報**の重要性……それぞれの仕事自体の**公共性**が高いことも見てとれ、これらが大橋図書館の「源流」として考えてよいのではないか。

- 
- ▶ 大橋図書館は、首都東京の都市化が進むなか、佐平が提唱したとおり地域の通俗図書館としてサービスを実施した。
  - ▶ 文教地区に立地したことから、学生などの利用者が詰めかけた。このことは図書館ができれば多くの市民が利用することを実証した。
  - ▶ それが坪谷善四郎の建議となり、東京市立図書館の設立を実現させた。さらにはすべての区に図書館ができることとなった。

---

▶ 震災後に関しては、別の角度から大橋図書館の活動を見ておきたい。表6は、1936年の文部省の全国調査で、蔵書数が大橋図書館よりも上回る、道府県立、市立を比較したものであるが、震災後10年余ということ考えると復興のスピードは驚異的だったことがわかる。



## 表6 蔵書数上位の図書館との比較

	蔵書数	図書費	閲覧人	閲覧図書	職員
県立 大阪府立	247,632	27,349	1,264	2,021	90
県立 岡山県立	138,582	4,500	687	916	21
県立 京都府立	137,805	10,800	399	138	30
市立 東京市立	185,259	不詳	913	1,107	35
市立 名古屋市立	135,468	13,000	954	1,611	56
私立 大橋図書館	132,952	10,000	675	1,580	40

- 
- ▶ 大橋図書館には、閲覧料を払ってまでも利用したいという人びとが押しかけた(日比谷以外は無料)。さらには高額な保証金を預けてまでも多くの方が館外貸出をしている。また、わざわざ遠くから(地域に図書館があるにもかかわらず)足を運ぶ児童も少なくなかった。
  - ▶ お金を払ってまでも、遠くからでも利用するに値する図書館だった、ということか？ それは具体的には何を指すのか.....
  - ▶ 第1、豊富な資料 第2、整備された施設・設備 第3、サービスの充実につとめる専門性を有するスタッフの存在(具体的に見てきたとおりであり、現在われわれは、これを図書館の3要素と言っている)

- 
- ▶ 震災後では、東京市立図書館からの転入者による功績が大きい  
が、坪谷にしてみれば、自分がつくった図書館で育った図書館員と  
いうことになるかもしれないし、竹内らもそのように考えて、大橋図  
書館の門をたたいたのかもしれない。大橋図書館という公共事業  
を提起した大橋佐平・新太郎父子に対して、社会の変化に応じた  
図書館づくりの蓄積が、「公共図書館の源流」と呼ぶにふさわしい  
活動を生みだした、ということになるのかもしれない。